A Study of the Bollnow Theory of Time
——The Pedagogical Meaning of Theory of Time——

Yoshiyuki Hirooka
Baiko Women's College

The purposes of the present paper are to grasp with a technique of philosophical anthropology the theory of time advanced by O.F. Bollnow and to demonstrate the central problem, which is apt to be lost sight of while we are engaged in excessive pursuit of a predetermined and fixed plan in life and education.

Hence, first in this paper, we regard the elementar structure of human constitution of time as an active composer of the future. We show that endeavors for the realization of an object are necessarily done on a fixed plan. but any mature plan can be interrupted by an accident or a destiny, but any mature plan can be interrupted by an accident or a destiny. In this case, how can men of today accustomed to following a fixed plan attack the problem?

Then, we consider "hope" as "open time", which is made possible beyond the domain of "closed time", which is typified in a fixed plan. Moreover, in order to clear up the concept of "hope", the promising relation filled with reliance on the future, which is also the ultimate premise, we examine thoroughly Bollnow's reading in comparison with Marcel's and Bloch's.

At the end, we shall touch on Bollnow's pedagogical standpoint that the ultimate ground for human beings exists only in "hope", which transcends every predetermination or expectation.

ボルノーにおける「時間論」の一考察

——それの教育学的意義——

広岡義之

一　問題の所在

本稿の目的は、ボルノー(O.F.Bollnow, 一九〇三—)の「時間論」[1]を哲学的人間学の手法で把握し、人間の生や教育における「計画思考」の過度の追及がみすごしがちな焦眉の課題を論証することにある。そこで小論ではまず、人間の「時間的態勢の基本構造」(die elementare Struktur unserer zeitlichen Verfassung)を「積極的な未来の自由な形成者」と特徴づけ、その結果、人間の「目標志向的行動」は必然的に「計画性」に従って展開される、という見解を導き出す。しかしどのような用意周到な計画も偶然や運命によって措定される限界に行きあたり、そのとき計画的思考に慣れきった人間にとってどのような問題が生ずるのかを検討する。その後、われわれは「閉じられた時間」としての計画的思考の彼岸で与えられる「開かれた時間」としての「希望」概念を明らかにしてゆく。この生の究極的前提としての未来への信頼に満ちた関係である希望を論究するために、ブロッホ(Ernst Bloch, 一八八五—一九七七)とマルセル(Gabriel Marcel, 一八八九—一九七三)の思想を基軸として考察を進める。最後に、希望のなかにのみ一切の計画と期待を越えて広がる究極の根底が存するという教育学的見解の立場に触れ、教育計画の重要性を認めたうえで、なおその計画がなおざりにしている教育的課題をボルノーの哲学的人間学における「時間的態勢」の文脈のなかで探り出してみたい。

(1)

一　註

O.F.Bollnow:Das Verhltnis zur Zeit. Ein Beitrag zur pädagogischen Anthropologie. Bd.29. Quelle und Meyer, Heidelberg, 一九七二　森田孝訳『時へのかわり――時間の人間学的考察――』、川島書店、一九七五年。なお、ボルノーの時間論についての先行研究としては以下の論文を参照されたい。

岡本英明著、『ボルノウの教育人間学』、サイマル出版会、一九七二年、第七章、「ボルノウの時間論の問題」一七六頁～二〇一頁。

横山利弘論、「時間性への教育――教育におけるゆとりの問題――」、名城大学紀要、十巻、一九七七年、三七頁～四六頁。

伊藤幸子論、「ボルノーの教育思想――人と『時間性』のかかわりあい――」　緑ケ丘学園延岡短期大学紀要、八号、一九七七年。一頁～一六頁。

大西恭子論、「O.F.ボルノウにおける『希望』(Hoffnung)の概念についての一考察――"Das Verhltnis zur Zeit"を中心に――」、関西教育学会紀要、二号、一九七八年、五頁～九頁。

加澤恒雄論、「新しい教育学の地平をめざして―O.F.Bollnowにおける『時空』の問題―」、酒田短期大学研究紀要、九号、一九七七年。一頁～二二頁。

川勝清司論、「O.F.ボルノーにおける人間の開放性についての考察」、京都大学教育学部紀要、XXVⅢ号、一九八二年。二六七頁～二七七頁。

西村義人論、「『倫理の原動力としての希望』の現在―ブロッホ・ボルノー・モルトマンに即して―」、八五頁～一〇二頁。『実存のパトス―実存思想　論集二―』、実存思想協会編、以文社、一九八七年、第一刷。

二　計画思考の本質と限界

ミンコフスキー(E.Minkowski, 一八八五―一九七二)においては、「われわれの生は本質的に未来に向けて定位づけられている」[1]と言われ、同様に時間の三つの次元のうちで未来の優位を強調するハイデッガー(M.Heidegger, 一八八九～一九七六)も「根源的かつ本来的な時間性の第一義的な現象は未来である」[2]と言い切っている。こうした根源的でありながら未だ決定されておらず、かつわれわれに開かれている重要な未来の領域をボルノーは彼の「時間論」のなかでも最重要の課題と考えている。未来とは「まだ決定されていないもの、開かれたもの、まだ確定されていないものの領域」である、と考えるボルノーにとって、未来の優位性とはこの「開放性」を意味する。それ故、われわれはこの未来の開放性という視座に従ってさしあたり彼の時間論を考察してゆくことにする。

第一の方向として、人間が仮に自分自身を固定した存在とみなすならば、未来は「自分の方に向かってくるもの」[4]となり、人間は「未来がかれに示してくれるものに引きわたされていると感じ」[4]ることになる。右のごとき固定化された人間の「時間的態勢の基本構造」[5]からみると、われわれの生において「未来の出来事を予見し、おそらくはあらかじめ計算することさえできるような、いくつかのことがあるということ、しかし、それに並んで、われわれがまったく予見することのできない、きわめて多くのこと」[5]が存するのである。もちろん、現実のなかで生きている人間は寄るべもなく彼の周囲で生起する出来事に引き渡されているが、同時に彼はまたこの出来事に自ら介入することができるし、またある程度は自己の未来を規定しうる。それ故、ここから人間の未来への関わり方の第二の方向、すなわち人間を「自ら積極的に未来へとおしすすんでゆくもの」[6]あるいは「自分の未来の自由な形成者」として把握する方向で、われわれはさらにボルノーの時間論の考察を進めてゆくことにする。

ボルノーによれば、人間が上述のごとく未来の形成者であり責任を負う存在であるならば、彼はその未来を「気にかけ」「利用しつく」すべきである。そうした在り方は、いみじくもニーチェ（F.W.Nietzsche, 一八四四－一九〇〇）によって指摘された「獣のように心配ごともなく漫然と」[7]無頓着にのらくら暮らす「群衆」の本質とは正反対の「時へのかかわり」方をするはずである。それ故、ここでは「人間が未来のなかへと目標を投企し、それに必要な手段について熟考するような事例」[8]が問題となってくる。ボルノーは人間の未来へのこうした「目標志向的行動」つまり「未来への責任ある先取り」[9]を「計画」と呼ぶ。換言すれば計画とは「一定の目的を達成するために合理的に構成しつくされた投企」[10]、もしくは「目標に向かって、努力するこの未来へ向けての関係態度」[11]と定義できよう。冷静な計算に基づく計画はそれ故に「一切の感情要素」が排除されねばならないとボルノーは考え、そこから人間の計画の本質とその限界への問いを追及してゆこうとしている。

生活秩序がますます複雑になる現代において、人間の投企が予見しがたくなるにつれ、ますます意識的な計画は必要不可欠なものとなる。その上、「自主性、主体性を過度なまでに重んじる現代の『進んだ』思考にとっては、まさにこのような『責任ある形成』を許す未来のみが、真に開かれた未来と考えられていると

言ってもよいだろう。[12]」しかしボルノーはむしろ計画の本質に横たわる時間理解をもう一度問い直そうとして次のように述べている。すなわち「プランニング思考の無批判な過度の追及は未来の関連のもう一つの少なからず重要な諸側面を無視し、ついには人間の生活に宿命的な作用を及ぼす[13]」と。それではボルノーは計画の本質をどのように捉えているのだろうか。彼によればプラン(Plan)という語は、ラテン語の"planum"(=eben 平面の)に由来し、最初は建築物などの空間の平面図から次第に時間的な概念へと転用されるようになった。したがってここで重要なことは、時間が空間と同様に「鳥瞰図」的に見渡しうるものでなければならずその限りにおいて、時間は流動性をその本質とするにもかかわらず「完結した世界」を表し、そこでは進歩のようなものは存在しえない、という点である。[14]すなわちボルノーは時間表象の「空間化」の根本的誤謬を「閉じられた時間」(geschlossene Zeit)もしくは「閉じられた世界」と定義づけている。これは「そのなかで起こりうる一切のことがすでにあらかじめ、それの本質上、確定しているような世界」[15]つまり、計画の完全さと世界の閉鎖性とが厳密に対応する世界においては、原則的に何ら新しい事物は存在せず、また存在してはならない、ということを意味する。

しかし、こうした人間の時間投企の探究において「どのように用意周到なプランニングでも、予見しえないものによって、偶然と運命によって措定されている限界、一切の人間の努力を挫折させうる限界にぶつかる[16]」のである。われわれは技術的に予測し計算することのできる世界に慣れきって生活しているので偶然や運命は克服することのできない災難として現れうるにすぎない。それ故ボルノーは次のように言う。「現代の技術的態度は人間の生の運命的性格に対して盲目にし、またまさにそれゆえに、大きな破局が現実にかれの上にくずれ落ちるとき、人間をよるべなく置きざりにする。[17]」と。人間の未来に対する運命的かつ脅威的な局面に対して、われわれはいかなる態度を取ればよいのであろうか。人間がその日暮らしの無思慮な安逸さを甘受するならば右のような脅威や悪しき偶発的出来事を考慮に入れずに生き続けることもできようが、真実なる生を探究しようと試みる限り、「人間は人生の原則的に廃棄しえざる不確実さを意識して自己に引きうけなくてはなら[18]」ない、というボルノーの主張もうなずける。こうした未来の宿命的な出来事に対しては、人間のいかなる綿密な計画も究極的には真の解決

をもたらすものではないこと、すなわち人間の計画の完全さが崩壊することを、われわれは熟知している。

しかし、ここで注目すべきはボルノーの次の言説である。もし人間が彼の運命や威嚇を回避せず、真向からその生の底知れぬ危殆と取り組むならば、そのときにのみ「かれは類いまれな経験をする」[18]と。これは、人間とは未来の見通しが困難であるにもかかわらず未来への信頼に満ちた関わりを獲得しうる可能性のあることを暗示している。

彼は続けて言う。「人間はこの瞬間に、根拠づけることはできぬが、しかし神秘的に現前する確実さ、自分が底無きものの中に転落するのではないだろうという確かさ、・・・まさに最悪の危殆に瀕して或る包摂的な存在・・・によって自分が支えられていると感ずる確かさ、を経験するのである。」[18]ボルノーはそれを「希望」(die Hoffnung)と呼ぶ。すなわち「わたしが希望しながら未来に対処する仕方において、わたしは、未来の贈物の根本的に全く予見できぬものにたいして、開かれている」[19]とボルノーが言うとき、希望とは、生の究極の前提としての「未来への信頼に満ちた関係」であることがわれわれに理解できよう。人間の生を充実させる未来への関わり方の一つの力が「計画的形成」とするならば、この希望は未来に対する人間のもう一つの、しかも究極の力の源泉となりうる。しかも両者の関係はけっして相反するものではない。むしろ希望は「プランニングに味方するものであり、プラニングがそれの限界にぶつかる場所で一切にひろがり一切を基礎づけつつ、姿を現わす。」[20]われわれは次に、ボルノーの希望概念の特徴をさらに深く探究するためにブロッホとマルセルの思想の核心を分析してゆくことにする。

二　註

(1) Bollnow: Das Verhltnis zur Zeit, S.56. 以下、VZと略記。
(2) Bollnow, VZ S.56. M.Heidegger.Sein und Zeit. Halle／Saale.S.329〔桑木訳、『存在と時間』、岩波文庫版、下、五七頁〕のことば。
(3) Bollnow, VZ S.56.
(4) Bollnow, VZ S.56.
(5) Bollnow, VZ S.58.
(6) Bollnow, VZ S.57.
(7) ボルノー講演集、浜田正秀訳、『対話への教育』、玉川大学出版部、一九七三年。五一頁。
(8) Bollnow, VZ S.60.

的に、ボルノーは、「まったく相互に異なった出発点から独自の考えぬかれた希望の哲学を発展させた現代の二人の思想家」[1]であるブロッホとマルセルの思想との対決をとおして自らの思想を展開している。

a　ブロッホの知的希望とその限界

さてブロッホは好んで「知識のある・具体的な希望」(wissend-konkrete Hoffnung)とか「希望の知識」(Wissender Hoffnung)という言葉を使用するが、それは彼の思索のなかでは「理解された希望」(doctas spes)もしくは「情報知を与えられた希望」として定式化されている。しかし、「知」と「希望」の結合ということがはたしてありうるのか、という批判的な問い、すなわち「知的であるということは、どこまで希望の本質と結びつきうるのか」[2]という問いがボルノーと共に提出されねばならない。ブロッホの「知的希望」の概念はむしろ人間の計画の契機ではないのか、という観点からボルノーの批判は始まる。「知ることと希望することとが同じように必要であることが強調されるのは正しい」[3]としても、知及び知に基礎をもつ計画と希望とは決定的に次元の異なった時間構造ではないのか。つまり、知や計画は人間の認識や理性の働く場であり、そこではぎりぎりの限界にいたるまで、計画

(9) Bollnow:Pädagogik in anthropologischer Sicht, Tamagawa University Press, 1971. S140.
(10) Bollnow,VZ .60.
(11) ボルノー講演集、前掲書、五二頁。
(12) 川勝清司論、前掲書、二七二頁。
(13) Bollnow, VZ S.61.
(14) 岡本英明著、前掲書、一九二頁参照。
(15) Bollnow,VZ S.62.
(16) Bollnow,VZ S.89f.
(17) Bollnow,VZ S.71.
(18) Bollnow,VZ S.72.
(19) Bollnow:Neue Geborgenheit. Das Problem einer überwindung des Existentialismus. Kohlhammer, Stuttgart, 3 Aufl. 1973, S.113. 須田秀幸訳、『実存主義克服の問題――新しい被護性――』、未来社、一九七八年。第三刷。
(20) Bollnow,VZ S.72.

三　「開かれた時間」と「希望」

本章では、未来に対する「計画的形成」と予測しえない偶然や運命との対決を考察することが前提となるがその際、「一切の運命的な脅かしを克服する信頼にみちた未来関係の相応の分析によって、すなわち希望の分析によって」[1]論考を進めてゆくことにする。具体

可能なものは計画どうりに実施すべき性格を有するもの、と考えられよう。右の事柄を受けてボルノーはさらにブロッホ批判を展開してゆく。いかに厳密な計画といえども、予測しえない偶然と運命によって遂行不可能となることが現実には生ずるわけで、そうした限界状況では、計画も知も全く意味を喪失してしまう。そこでは人間の一切の企ては無に帰せしめられ、ここで初めて「より深い、本来的な意味における希望、すなわち人間が一切の脅威にもかかわらず底知れぬ深淵に落ちることなく、何らかの仕方でともかく切りぬけてゆくという人間の信頼としての希望が出現する」[4]とボルノーは考える。それ故、真の「希望」はけっして知的、理性的な範疇に属するものではありえず、むしろ包括的な存在根拠へと止揚された宗教的な根本感情ともいうべき領域に属するものと言わねばならない。

ここでボルノーのブロッホ批判はより鮮明なものとなる。ブロッホにあっては外部からやって来る妨害的な偶然や予測しえぬ運命を積極的に自己の希望概念のなかに取り入れようとはしないが故に、「仮借なく尖鋭化して言えば、ブロッホが希望と名づけているものは、自らの力の限界において、救いとなって意を迎えてくれるものに身を任ねる、真の希望ではまるでなくて、自己信頼であり、自己の力への信頼」[5]以外の何ものでもない。換言すれば、ブロッホにあっては、人間にとって希望の最も内奥の本質に属すると思われるもの、すなわち「未来から自己に向かってやってくるところのある支え運ぶ土台によって受け止められていると感ずる」[6]ものが欠落している。こうしてブロッホの希望が人間の理性的存在に基づく自己信頼に立脚するのに対して、他方ボルノーのそれは、未来への信頼に満ちた関係態度に依拠することが理解される。

b　マルセルの絶対的な希望概念

それでは、人間は自らの力の限界において希望に身を委ねてよいというボルノーの立場は運命や偶然との関わりでいかなる意味をもつのか。[7]この点を、ブロッホとは異なり実存哲学を全面的に拒否することなく、「この克服の可能性を希望のなかに見」[8]ている、マルセルの思想に依拠しつつ論究してゆくことにしよう。「希望は生と兄弟のように結びつけられている」[8]とのマルセルの言説を援用しつつ、ボルノーは、この「希望」こそが「人間の生をその時間的状態において把握しうる根本構造」[8]であると考え、以下詳細な分析を続けてゆく。

マルセルは単純な希望「私は・・・ということを希

望する」と、絶対的希望「私は希望する」とを区別する。単純な希望は「人間の一定の、直観的に表象しうる結果の出現を希望する」[9]性質のものであり、それは実現されるか否か全く当てにならない。他方、絶対的な希望は一定の表象された目標に固執することなく、内容的にも無規定のままで一定の願望に凝縮することなく人間の魂の一般的状態を表している。マルセルは重い病人を例にとり次のような説明を加えている。すなわち、その病人が一定の期間の後に治癒する考えにこだわっている限り、現実がそれと反対の形で現れたときには幻滅に陥る他ない。しかし、むしろ仮に病状が回復しなくともけっして一切が終わりなのではなく、その時にも「何とか（irgendwie）」なりゆくという人間の限界を越えた根源なるものによって支えられていることを人間が認識するとき、そこで彼に生ずる「純化と変容」がまさしく真の「絶対的な希望」なのだ、とマルセルは言い切っている。ここに自己の力への信頼としての「知的希望」を主張してやまぬブロッホの思想との根本的な質的相違点が明確に示されているように思える。

しかし誤解を避けるために繰り返せば、こうした「絶対的な希望」とはひとりでに人間の手のなかに入るものではなく、逆に多くの特別な努力によってのみ獲得される内的状態を人間に要求する。そのことはすなわち、「人に近づいてくる、他の人間の要求に対して開かれているという用意と能力」[10]（傍点筆者）を意味し、そうした内的状態をマルセルは「自在性」「随意性」（Disponibilität）もしくは「自由な処理能力」（Verfügbarkeit）という概念で表している。「自在性」「随意性」とは未来に対する開放性の意で、希望と直接に関係する。マルセルの別の表現を借りれば、「自在性」とは「たんなる環境を機会に、あるいは恵まれた状況（faveurs＝恩恵）にさえ変える能力」[11]である。逆に、一切の予見しえない出来事を厄介な妨害としか捉えられない、自己自身の意図のなかに閉じこもっている人間を「不随意」的、すなわち、自在でない内的状態にある、という。それ故、「さしあたりは妨害的と見えるもののなかに、まさにそれを摑みとり、利用し尽くすことが肝要である新しい創造的な可能性を認識する人間は自在」[12]であるといえよう。計画的思考のみに固執する不随意な者は、自己満足の結果、自己の殻のなかに閉じこもり、新たな経験を拒絶する危険を孕む。他方、自在的・随意的な人間とは「固い殻を突きやぶり、新たな経験をなし、その助けをかりて

生を修正し、更新する能力を」[12]保有する者に他ならない。

しかしボルノーは深くマルセルの思想に共鳴しつつも、次の一点に彼の希望概念の限界をみてとる。ボルノーによれば「希望」に基づく人間の「自在性・随意性」が未来からの贈与としての「生の呼びかけ」に応える能力であるとするならば、そのとき人間は「偶然が瞬間から瞬間へと目まぐるしくかれにもたらす、さまざまな『呼びかけ』に無方針に引きわたされ」[13]たままであり、いつでも「人間は本質的に反作用的な、外部からやって来る刺激を当てにした存在」[13]でしかないことになる。こうしてボルノーはマルセルの思想の限界を次のように指摘する。すなわちマルセルは「人間を、計画し、自分の世界を責任をもって形成する存在だとは考えない。・・・かれは自発性をなおざりにしている」[14]と。そのうえでボルノーの最終的見解に従えば、「自在性（随意性）」もしくはまったく予見しえない出来事に対する受容能力は「〔内部〕からやってくる能動的な形成意志と、『外部』からやって来る呼びかけを受容する応答への用意との間の交互作用においてはじめて」[15]創造的な発展を可能ならしめるのである。

c「希望」と「期待」

とはいうものの、ボルノーの以上の批判、すなわち、マルセルの希望概念には自発性が欠如している、という欠点の指摘がなされたからといって、マルセルの「希望」もしくは「自在性」の本質的意義はいささかもそこなわれるものではない。ところで、ボルノーはこれとの関連で、「期待」と「希望」の根本的差異についての鋭い人間学的分析を試みている。しかもこの両者の比較分析は、ボルノーの時間論の考察からさらに発展する思想的可能性の萌芽を包含している「時間論の教育的意義」の中心テーマとも密接に連動する重要概念である、ということもここであわせて明示しておきたい。

「単純な希望」（マルセル）に相当する「期待」は「あらゆる外見での受動性にもかかわらず、緊張した傾注のなかに現れる、強い内的能動性」[16]を有するのに対して、絶対的な「希望」にはかならず、「ある種の内的弛緩状態」[16]がみられる。あるいは「期待は一定の志向を含んでいるのに反して、希望には不定性と内的解放性とが属している」[17]とも言えよう。さらにボルノーは次のように言う。「人びとは期待の際に、期待されている出来事に向かって動くが、希望の際には、それと

逆に、出来事が自分の方に向かって来るにまかせる」[16]のである。ここから理解できることは、「期待」の時間構造は「閉じられた時間」に基づく、という点である。期待された出来事が現れることによって、「現在自体のなかにすでに存在している間隙がぎっしり詰められ」[18]るが故に、人が期待するとき「未来はすでに、全くはっきり下図ができている」[18]。すなわち時間は閉ざされた状態になっているのである。そこでもし期待した出来事が実現しなければ、「流れ去る瞬間は（紐が切れた真珠だまのように）意味もなく滑り落ちていくのである。」[19]さらに、閉じた時間構造の期待にとって「未来は、現実に入りこむずっと以前に、その内容はすでに決定している予見できる結末であり、それは本質的に・・・機械的結末の時間経過にほかならない。」[19]こうして人間が未来に対して、期待する在り方で向かうときにはいつでも、彼は時間のなかに閉じこめられ、他の一切の出来事から遮蔽され、彼の心的態度は他のものにたいして「不随意」のまま諸々の生の可能性の地平から遠ざけられてしまう。

　これに反して真の希望は「開かれた時間」のなかでのみ生ずる。希望は未来の根本的に予見しえないものに対して自己を開放することにより、諸々の可能性を人間に与える。すなわちボルノーは別の箇所でも次のように述べている。すなわち「この未来は、全く見透すこともできず、計算することもできないものであるにもかかわらず、決してわれわれを嚇やかすものとは感ぜられない。」[20]と。ボルノーによれば予見しえない未来をも合理化したがるわれわれの計画的意識とは全く逆に、希望する人間は、予測しがたい未来をもはや「威嚇」として捉えるのではなく、人間を慈悲深く被護し、「空虚のなかに転落させない、支持的な根底」[21]として理解するであろう。それ故ボルノーにあっては、真の希望は人間に対する「信頼の表現」であり「生の究極の前提」となるのである。

三　註

(1) Bollnow, VZ S.73.
(2) Bollnow, VZ S.81.
(3) Bollnow, VZ S.108.
(4) Bollnow, VZ S.82.
(5) Bollnow, VZ S.89. しかし西村氏はここで、ボルノーのブロッホ批判は失当である、との見解を述べている。ボルノーによれば、ブロッホは「予期せずに降りかかる運命を知らないか、或は少なくとも自らの体系に本質構成要素としてとり入れず」（VZ.89.）したがって

ブロッホにおいては「破局乃挫折の可能性が視界に納められていない」(VZ.89)とボルノーは考える。しかし西村氏はブロッホの『希望は失望（幻滅）させられることが可能か』と題する講演に依拠しつつ、次のようなブロッホの希望理解を展開している。すなわち「危機のあるところまた救いも増す」（ヘルダーリン）という「危機と信念を真理態とする希望」(das Prinzip Hoffnung,S127.)は救いの保証などではなく、むしろ「失望可能」である。それどころか「希望は失望可能でなければならない。さもなければ、それは全く希望ではないことになろう」(Literarrische Aufsätze, S.386.)というブロッホの言説を引用して、ボルノーのブロッホ理解を一部批判している。しかしここではこうしたブロッホ理解も存するということを明示するにとどめる。さらなる考察は次の機会に譲ることにする。西村義人論、前掲書、九二頁～九三頁。

(6) ボルノー著、『対話への教育』、七〇頁参照。
(7) 大西恭子論、七頁参照。
(8) Bollnow, VZ S.91.
(9) Bollnow, VZ S.92.
(10) Bollnow, VZ .93.
(11) Bollnow, VZ S.94. Vgl.,G.Marcel,Homo Vitor. Prolegomènes à une Métaphysique de l'Espérance. 一九四四. 西谷啓治他訳、『旅する人間』、マルセル著作集四、春秋社、一九六八年、二八頁参照。
(12) Bollnow, VZ S.90.
(13) Bollnow, VZ S.96.
(14) Bollnow, VZ S.96.f.
(15) Bollnow, VZ S.97.
(16) Bollnow:Neue Geborgenheit .S110.
(17) 岡本英明著、前掲書、一九六頁。
(18) Bollnow,a.a.O.S.110 .
(19) Bollnow, a.a.O.S.112 .
(20) ボルノー著、小島威彦訳、『希望の哲学』（講演集）新紀元社、昭和四五年。重版、二七頁。
(21) Bollnow,a.a.O.S.113 .

結論　「時間論」の教育学的意義

以上のことから私はボルノーの時間論を教育学の領域にしぼって言及することにより、本稿の結論としたい。ボルノーによれば「教育的関係の本質には、教育者が希望と期待をもって、現在をこえて未来へ先き走るということが含まれている」[1]という。なぜなら、教育とは「たとえそれがずっと先の未来であっても、未来において実現すべき目標をめざして積み上げてゆく仕事」[1]だからである。具体的な教育の営みのなかでも、両親や教育者はある程度までは、子供に「期待」

をかけることは許されるし、むしろ必要なことでもある、とボルノーは確信する。その場合、親や教師が慎重に計画した子供への要求を実現することが期待されることになるが、しかし「そのような正当な期待さえも、つねに、比較的短い時間の範囲についてのみ、それをかけることが可能」[2]であるにすぎない。換言すればそうした期待が、教育者や親たちの虚栄心によって理性的な限度をこえるようなことはけっして許されてはならないだろう。そこで設定された期待が真に意味あるものたりうる限度は「あくまで、生が計画可能な経過として人間の手で左右される範囲において」[2]ということになろう。予見できない未来に対して、すなわち教育の領域に限定するならば、あらかじめ見通すこともできず計画どうりに成長しかねない子供の発達に対しては、あまりにも一方的に形づくられた親や教育者の期待は有効たりえない。というのも、こうした期待は親や教育者自身の視野をせばめるのみならず、子供への期待がはずれるやいなや、自らに失望し、子供を非難することにもなりかねないからである。

元来、教育学は「教育者が目標を意識した行為をとおして計画的に引き起こすことのできるものだけで」[3]（傍点筆者）、すなわち教育者が自ら作り計画したものだけで満足できない性格を有する、とボルノーは考えている。なぜなら教育学こそが、今ここで自らの問題に悩み苦しんでいる子供に「生の援助」を提供する学問であるべきだからである。おそらくそれはもっと鋭く、次のように理解してよいだろう。すなわち教育学は教育的意図や計画がどこまで子供たちに意味深く関与できるかを明確にし、また子供が何らかの危機的状況におかれている場合に、教師はどのような援助がその子供に可能なのかを自ら問うてみる必要があろう。たとえば教育者は自らの教育的活動において、たてられる限りの合理的計画を立案し実践するべきであり、そこからおのずと「計画可能性」の限界も明確になってくるであろう。何故なら、人間の生について十分に配慮された合理的計画といえども、予測しえぬ偶然と運命によって繰り返し妨害されるからである。ボルノーは言う。「人間は絶えずその意図の新たな方向づけや変更を余儀なくされる」[4]がゆえに、教育者も同様に「自分の教育計画の奴隷になることを警戒」[4]しなければならないと。全く予期しえない出来事が教育者の準備した教育計画を妨害するとき、彼は挫折する他ない。それ故に「教育はきわめて限定された範囲でのみ計画可能なのである。」[4]

いずれにせよ、右のような「予知不可能な領域をも自らの手中に収めようとする企ては、人間の弱さやひいては教師や親のなかに潜む虚栄心にすぎず、そうした人間の「未来という時間的態勢」への誤った関わり方が、知らず知らずのうちに子供の固有の生を不当にゆがめ、傷つける結果になってしまっていないだろうか。ボルノーはそのことを決定的な問題点として明確にしたうえで教育者や親に以下のような根本的な転換を促している。すなわち「未来が新しいものや予期しなかったものに垣間見させてくれることがらに対して、開かれた信頼の心をもつこと」[6]（傍点筆者）が教育者の子供に対する心的態度にとって全き重要性を帯びることとなろう。それはまさしく前章以下でとりあげたマルセルの主張する「随意性・自在性」の概念、すなわち「先入見にとらわれることなく、予期せぬ新たな展開の呼びかけに応える能力」[6]をさし示すことに他ならない。

この「随意性・自在性」とは、まさしく「期待」とは正反対の人間の徳である「希望」においてのみ成立する。子供の発達に対して信頼に満ちた関係を保持している、と教育者が実感しうる場合にのみ、彼の究極的かつ決定的な基盤となる希望概念が未来という人間の時間的態勢の文脈のなかで捉えられてくる。仮借なく尖鋭化して言えば、希望している者は「多くの望ましい期待さえも裏切られ、未来に期するあらゆる試みも全く失敗に帰するとき」[7]でさえ、具体的な形はとるものではないが、「予見しがたい可能性の贈物に対して常に開かれており、また、現在のあらゆる困難の中にあってもなお、たとえいまは見えなくとも、必ずや『なんとかして』突破口を見いだす」[8]者のことなのである。こうした希望はとりわけ教育が成立する大前提でなければならない。なぜなら、魂を支える究極の本質であり未来をめざす生を可能ならしめる基盤としての希望こそが、子供を正しい仕方で発達させるからである。さらにこの希望こそが、手ひどく失望し落胆しているかもしれない子供に対して、「やがてはきっとすべてが『なんとかして』解決されるという確信を持ち、困難に打ち勝つ内的優越性」[8]をもたせるからである。こうしてボルノーの捉える希望概念は教育の「未来へ開かれた時間性」との関わりでひときわ重要な働きを有するものとなる。それ故この真の希望こそが「完全な生の未来における可能性へ開かれているもの」[8]であり、生と世界のなかでせめぎあう幾多の矛盾を包含しつつも、全き世界に包まれ、被護されている

という感情に支えられる根拠となりうる。この一点で希望という時間態勢は人間にとって宗教的な徳になり、「この究極の根底からのみ、一般的には人間的生が、また特殊的には教育的行為が」[9]成立しうるのである。

結論　註

(1) Bollnow: Die pädagogishe Atmosphäre. Untersuchungen über die gefühlsmässigen zwischenmenschlichen Voraussetzungen der Erziehung. Quelle und Meyer.Heidelberg. 1970, 4 Aufl., S54 以下PAと略記。森昭・岡田渥美訳、『教育を支えるもの――教育関係の人間学的考察――』、黎明書房、一九八〇年、11刷

(2) Bollnow,PA S.55.

(3) ボルノー著、Erziehung zur Frage. 森田孝・大塚恵一訳編、『問いへの教育――哲学的人間学の道――』、川島書店、一九七八年。2刷、十八頁。

(4) ボルノー著、前掲書、二〇頁。

(5) Bollnow, PA S.56.

(6) 森昭・岡田渥美の両氏はdisponibilitéを「融通性・ゆとり」と訳されている。

(7) Bollnow, PA S.60f.

(8) Bollnow, PA S.61.

(9) Bollnow, PA S.62.